

先生方の本気が支える日本一の文化祭

私は今でも生意気な高校生だったと過去を振り返る時があります。中学生までは自分で言うのもおこがましいのですが、とても素直でした。しかし、高校に入学した時、「フォークギターを買ってくれないか」と父にお願いしたところ、「弾けるようになったら買ってやる」と、練習したいから買って欲しい私の気持ちを察することなく、何とも解せない父の言葉が返ってきました。当時は、アリスやかぐや姫など、フォークソング全盛の時代で、ギターを弾きながら歌う姿にあこがれました。私は仕方なく祖母に相談すると、押し入れの中からクラシックギターを引っ張り出してきて「これはまだ使えるから」と渡されました。タンスの匂いがしみ込んだ大きなギターを片手に家に帰ると、ナイロン弦の低音の響きに落ち込み、いつまでも子ども扱いされているやり場のない気持ちで自分の根性を腐らせていきました。大人から言われると素直に受け止められず、やるべきことをやらない理由やうまくいかない時の言い訳は、無限に用意することができました。そんな高校時代、私を見捨てることなく真剣に私と向き合ってくれた先生がいます。授業中に眠気が襲ってきた時のこと、出席簿の角が私の頭に刺さりました。私は思わず、「居眠りくらいでそんなに本気にならなくてもいいのによっ！」と、ふてくされると「俺は怒る時も本気だ」と叱られました。その先生は、「勉強も部活動も遊びも本気になれ！それでも上手くいかない時は、上手くいく方法を考えろ！言い訳ばかりを考えるようなずるい生き方だけはするな。」が口癖でした。今でもその言葉が耳に焼き付いています。

令和5年9月23日(土)24日(日)、4年ぶりに制限なく開催した大成祭には、多くの来場者が本校に足を運んでくれました。模擬店が並ぶ中庭では「最後尾」と書かれた看板があちらこちらに見え、本校生徒が笑顔で来場者をもてなしていました。

私は、心弾ませ入場門をくぐり、50円と印刷された金券を片手に会場内で充実した時間を過ごしました。体育祭の時も感じましたが、想像を遥かに超えた生徒の熱気にはいつも驚かされます。このように生徒の力の結束が、総和

以上に発揮される理由には、先生方が本気で取り組む姿にヒントがあります。今年は、世界最大級のモザイクアートに挑戦することで最後まで生徒と成功を信じるあきらめない姿を見せてくれました。前日準備では、学校の看板となる入場門を力を合わせて組み立てていました。

開催直前に新型コロナウイルス感染症やインフルエンザが猛威を振るい、学級閉鎖で十分に準備することができなかったクラスもあります。やれない理由やできない言い訳はきっと山ほどあったでしょう。それでも「できない理由」より「できる方法」を考える先生方の覚悟は、まさに「本気」の証であったに違いありません。生徒との向き合い方がとても難しい時代になりました。

しかし、本校には、学びも遊びも本気で臨む先生方がいます。その本気が本校の教育と日本一の文化祭を支えていると確信しています。

青春は、買うことも、借りることも、強要することもできません。これは昔も今も変わってはいないはずですが、だからこそ、どのような時代になろうとも一度しかない青春を過ごす生徒と本気で向き合う本校教員の姿は、学びの匂いとなって生徒の目にしっかりと焼き付いたに違いありません。

令和5年10月

